



金継ぎ

竹西 明理

カナダ、ロイヤルローズ大学院

金継ぎとは？

金継ぎ（きんつぎ）、または金繕い（きんつくろい）とは文字通り、割れた茶碗を漆と金を使用し修理する、日本の伝統工芸技術です。壊れた破片は工芸家の手によって元の茶碗の形に継ぎ接ぎされることにより、新しい美的価値が生み出されます。茶道の精神が広まるにつれ、金継ぎの美術的価値は高まつたとされています。茶道では、ありのままを受け入れ、不完全さや傷も貴重で意味があるとされています。金継ぎされた茶碗や器に同じものではなく、継ぎ接ぎの模様や傷跡がそれぞれに独特な美しさを与えています。金継ぎは、器の壊れた破片の傷跡を隠す代わりに、美しい模様へと変化させる工芸技術です。

誰がこの概念を使用するのか？

金継ぎという用語には、今日3つの使い方があります。工芸技術、哲学的概念、そして比喩表現としてです。工芸技術としては、継ぎ接ぎされた器の美術的価値が見出された16世紀ごろから、工芸家達によって受け継がれてきました。哲学的には、伝統的美術作品として、禅宗の観念を提示するだけでなく、観衆に欠点を受け入れる事を促し、更に近代の大量消費文化と使い捨て社会に対して疑問を投げかける概念として使用されることがあります。比喩表現としては、失敗や不完全さを人生の一部として賞賛するという意味合いで使われます。金継ぎの研究の大半は美術・工芸の分野で、美術史家によって行われてきました。

異文化ダイアログとの関係性？

異文化ダイアログの分野では、比喩的表現として金継ぎは新しい価値観、物事の見解を提示します。美

しさとは何か、そして、失敗と不完全さをどのように受け取るのかという新しい観点を提案します。金継ぎの概念を知ることで、新しい人生の価値観を理解することができ、異文化ダイアログの中でも、価値観を理解し合う上でのツールとしての役割があります。異文化コミュニケーションの分野で、最も分かりやすい例としては、国、コミュニティー、または個人間での関係の修復の際の比喩表現として用いることができるでしょう。実際、金継ぎされた器の方が、壊れる前の器よりも価値があるということも大変重要です。決裂した関係も、修復の価値があり、その結果、前よりも強い関係性を築くことができるという望みを教えてくれます。

今後の課題

金継ぎという用語は、近年美術や哲学の分野で国際的に認識されるようになってきました。しかし異文化ダイアログの分野においては、比喩表現としての金継ぎの役割についてこれまでほとんど研究がなされておらず、今後の研究の可能性は大いにあります。金継ぎの観念が、近代の大量消費経済と社会に蔓延する使い捨ての思考にどのように新たな知見をもたらすことができるのか、というのも興味深い研究課題の一つでしょう。また、金継ぎという観念は、環境及び社会・経済における国際的な持続性に関する今後の議論に役立つことでしょう。

参考文献

- Evans, D. (2014). *Kintsugi: The art of broken pieces*. Greatcoat Films.
- Keulemans, G. (2016). *The geo-cultural conditions of kintsugi*. *Journal of Modern Craft*, 9(1), 15-34.